

別紙様式1		令和3年度 学校評価表				(中間 ・ 最終)				三原市立本郷小学校				校番(17)			
a 学校教育目標		夢大きく心豊かな児童の育成 ～知・徳・体 キラリと光る三つ巴っ子～				b 経営理念 ミッション・ビジョン		【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 地域を愛し、確かな学力と豊かな心を持ち心身共に健康な子どもを育成し、地域・保護者から信頼される学校									
評価計画						自己評価					改善方策		学校関係者評価				
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価			m コメント			
					h 達成値	h 達成値					イ	ロ	ハ				
確かな学力		◎基礎・基本の学力向上 ★学力テスト等の目標値達成率の向上 (算数科)	○学習の重点と系統性を意識した各学年の指導 ○NRTの結果を分析・活用 ○フォローアッププリント等の活用 ○三つ巴っ子タイム・チャレンジタイムの工夫・改善	単元末テスト(算数科)の平均点が80点以上の児童の割合	80	73.8%	74.6%	93.3%	B	市販テストにおいて80点以上の児童の割合は、74.6%であった。国語・理科に比べても算数に課題があり、特に高学年になるにつれ、児童の学力差が大きくなるという課題があった。個々の学力を把握し、特に思考力を問われる問題への手立て等を工夫する必要がある。	学力の定着を図るために、各学年で日常的に取組を進めるとともに、学校全体で課題と成果を交流・共有していく。チャレンジタイム等には、担任外の教員と連携し、複数で対応できる場を設けていく。また、低学年のうちから四則計算など基礎・基本の力を付ける取組を継続する。アシストシートなどを活用し、様々な問題に取組ませていく。	○			・算数の授業が分かって楽しいと思える児童が増えていることは、自信につながり他教科へも波及していくと思えます。		
	すすんで学び、よく考え豊かに表現する学力を育てる。	◎誰もが学ぶ喜びを感じる、主体性で対話的な学びの創造 ★ユニバーサルデザインの継続 ★論理的思考力・コミュニケーション能力 育成の場の設定	○日々の授業の工夫・改善、単元構成の工夫・改善 ○他教科・他領域との関連場面の意図的設定 ○学びの変革指導案の全員作成 ○授業モデル・本郷スタイルの継続と徹底	授業が分かって楽しい児童の割合	90	89.2%	91%	101%	A	「算数の授業が分かって楽しい」と肯定的評価をした児童は9割を超えた。ここ数年、授業改善のために本校の授業モデルが、教員や児童に定着している。各担任が授業づくりを工夫したり、児童主体の授業や単元を構築したりすることで、児童が主体的に学び、分かる喜びを感じることにつながった。	今後も組織的に授業改善を図り、児童が主体的に学ぶ姿勢を育てていく。また、「本質的な問」や「カリキュラム・マネジメント」に関わる研修を行うことで、問いの質を向上させ、児童の意欲を高め、学力定着を図る授業改善を行っていく。また、研究授業後の協議だけでなく、授業前に交流をさらに促進していくことで、教員の授業の視点を豊かにしていく。	○			・組織として授業改善に取組んでいることがよくわかります。そのことが成果につながっていると思います。		
		◎ICT教育の充実・推進体制の確立 ★ICT教育の充実 ★校内の推進体制の確立	○クロームブック等を活用した、ICT教育の計画の作成 ○ICTについての校内研修を実施し、知識の共有と工夫・改善	○各学年の学習計画の作成・共有化 ○学期に1回以上のICTについての校内研修の実施	100	100%	100%	100%	A	教員の指導力向上を図る研修を下半期7回実施した。学習計画の作成や実践例の交流もできた。今年度を通して、Google Chromeについて、教員の理解が深まり、児童への活用場面も増えてきた。児童のスキルのレベルも上がりつつある。今後、教科の特性や児童の実態に合わせて有効的に活用の仕方を考えていく必要がある。	今後も、教員の指導力を高め、児童のスキルレベルを上げていく必要がある。学習計画においては、今後の実践の中で振り返り・改善していく。授業では、ICTの有効的な活用について、教科の特性や児童の実態に合わせて取組を続け、交流・振り返りを通して、校内でより良い実践を共有し改善を図っていく。	○			・クロームブックの活用等、ICT教育を充実するために教師のスキルアップが児童のスキル向上につながっていると思います。		
豊かな心	地域を愛する心をもつとともに、夢や目標をかなえるための生活習慣を身に着けさせる。	◎考え議論する道徳の推進 ★授業が楽しい95%以上	○問題解決型の指導過程等、指導過程の工夫	道徳科が楽しいと思う児童の肯定的割合	95	92	92.3	97%	B	道徳科の授業改善のために、今年度は校内研修を4回行った。そこで、道徳科の授業の進め方や児童がより深く考える指導の仕方进行交流することで教員自身が道徳科を楽しみながら授業を行えた。	引き続き、道徳科の校内研修を行い、児童がより楽しく、教員と一緒に考えることのできる授業作りを行っていく。	○			・道徳科のみならず、経験豊富な先生方の授業を見たり、指導を受けたりすることで若手教員はたくさんのことを学ぶことができると思います。		
		◎道徳教育・生徒指導の中小連携。 ○道徳時間と体験活動の結びつけ ★自己肯定感90%以上 ★感謝の気持ちの表現95%以上	○児童会活動の主体的活動充実 ○目標となる具体的な姿の提示 ○強化週間の実施 ○児童会活動との連携	○自分にはよいところがあるという児童の肯定的割合 ○感謝の気持ちを表している児童の肯定的割合	85 95	80 93	80.5 94.5	95% 99%	B	児童会を中心に、ありがとう運動等の活動を積極的に行った。また、児童の自己有用感を高めるために、生徒指導の三機能を含めた授業作りを積極的に行うようにした。	児童会や委員会を中心に、児童自身が率先して動き、活動できる場を設定し、学校全体で感謝の気持ちが高まる活動を引き続き行っていく。	○			自信をもって授業をすることで、教師も楽しみながら授業でき、児童も楽しいと思えるようになってのではないでしようか。このような相互作用が広がればいいです。		
		○コミュニティスクールの導入にむけた、地域(人・もの)を活用した学習の推進 ★GT招聘、地域学習の推進	○地域ゲストティーチャーや読書ボランティアなどを積極的に活用 ○各教科、道徳の時間、総合的な学習の時間等で地域活用学習の導入	各学期ごとに学年で地域学習、ゲストティーチャーを積極的に活用した割合	100	100%	100	100%	A	新型コロナウイルス感染症に係る対策のため、地域ゲストティーチャーの方との直接的な関わりは難しかったが、間接的に指導を受けたり、手紙を送ったりするなど、各学年で工夫して活用した。	新型コロナウイルス感染症が落ち着き次第、積極的にゲストティーチャーを招待したり、クロームブックを使用した遠隔での交流をしたりするなど、来年度は多様な方法で学校と地域を繋いでいく。	○			・いじめ事案はない方がいいと思いますが、きちんと認知し取組めていることは評価していいと思います。		
		◎いじめ・完全不登校の根絶 ★いじめ0、完全不登校児0	○家庭との連携 ○支持的風土の学級経営	いじめ・完全不登校児童の数値	0	いじめ1件 不登校3名	いじめ2件 不登校4名	0%	D	今年度は、いじめ2件(解決済み)と不登校が4名(2月現在)であった。いじめアンケートの実施や問題発生時に迅速に対応を行うなど、積極的認知を行い、組織的に生徒指導を行うようにした。	引き続き、いじめアンケートや個人面談などの取組を積極的に行い、問題発生時は迅速かつ組織的に対応し、早期発見、早期解決を目指していく。	○			・早期に把握し、学校全体で共有し保護者の連携も大切だと思います。		
健やかな体	体力を高め、食に対する高い意識を育てる。	◎体力の向上 ★体力テスト 握力 平成31年度全国平均以上の児童の割合 70% ★体力テスト 20mシャトルラン 平成31年度 全国平均以上の児童の割合 70%	○体育科授業の運動量の保障、工夫改善 ○鉄棒、縄跳びの継続的な実施	体力テスト 握力、20mシャトルランの全国平均を上回る児童の割合(%)	70	42%	40%	57%	D	手渡り、登り棒、鉄棒などを取り入れ握る力の向上を図った。握力の全国平均を上回った児童の割合は、40%であった。持久走月間を設定し、3～5分間走を継続し、児童の持久力の向上を図っている。シャトルランの計測はコロナ禍のため実施できなかった。縄跳びに対して意欲的に取組んでいる児童の割合が86%である。また、縄跳びの技能が向上していると実感している児童が87%である。	今後も鉄棒、なわとび、サーキット、持久走(冬季)を体育の時間の中で継続的に取組み、子供の体力、身体感覚を高めていく。外遊びを奨励し、子供の運動量の保障に努める。	○			・コロナ禍での運動機会の減少も影響しているのではないかと思います。		
		◎食育の推進 ★残菜0の推進0の日週3日	○食育指導・保護者啓発活動の実施 ○集中取り組み期間の実施	集中取り組み期間に残菜0(週3日以上)にしたクラスの割合(%)	90	58%	75.0%	83%	B	1学期に比べ、2学期の残菜調べでは、残菜0の学級の割合が増えた。苦手なものも食べる児童が増えている。継続的な取組みの成果である。	来年度も引き続き、給食の中で、食育指導を継続していく。食べる量を調節して、自分の決めた量を食べる指導を行う。また、食事のマナーについても指導を継続し定着を図る。	○			・縄跳びは本中ブロック健やか部の統一した取組ですが、全校で取組むことで体力向上に向かっていっていると思います。		
		○清掃活動の質の向上 ★無言、時間いっぱい、隅々	○掃除の仕方の指導の徹底 ○短期集中取組期間の設定	3つの項目を達成した縦割り班の割合(%)	80	72%	93%	116%	A	今年度も縦割り班掃除に取組み、魂(だまてすみずみまで 時間いっぱい)掃除ができる班が約20%増えている。学級掃除でも今後、同様の掃除ができるように指導を続けていく。	来年度も継続して、縦割り班掃除で魂掃除に取組み、縦割り班掃除を通して6年生のリーダー性を育て、魂掃除ができるように指導していく。	○			・食物をいただくことに感謝する心が育っています。		
信頼される学校	地域や家庭の願いに応えとともに、15年間を見据えた教育を行う。	◎情報を公開し、説明責任を果たし、満足度向上 ★月1回以上、学校だより・生徒指導だよりの発行	○学級通信、学校だより、ホームページでの情報発信 ○学級懇談会、個人懇談会をとおして説明責任を果たす。	行事や家読の後、保護者へのアンケートと感想による子供の成長への満足度の割合(%)	90	90%	90.0%	100%	A	各種行事・参観日等の縮小などで学校で児童が学びを深め、活躍する場を直接見ていただく場が限定された。その中で、ICTも積極的に活用していきながら、学校内の児童の様子について積極的に情報発信していき、各学年、学校だよりなどは計画の100%以上を達成した。	学級懇談会等もICTを活用し保護者とのつながりを深めていく。また、個別の連携は継続して行っていく。保護者の満足度や意見を定期的に把握するために、年に3度のいじめアンケートの際にアンケート項目を新しく付け加え、保護者の願い等に応えていくようにする。	○			・コロナ禍で行事、参観日が縮小の中、情勢に沿った情報発信を工夫してよいです。		
		○タイムリーな服務研修の実施 ★時期に応じた研修内容、全職員の担当割り当て	○不祥事防止委員会が中心となり、マンネリ化、無自覚がない内容を計画	服務や仕事に対する職員への意識を向上させる。満足度の割合(%)	80	80%	80.0%	100%	A	「日々の業務で充実感を得られていますか」という割合で80%が肯定的評価であった。業務改善を行いながら、「子どもと向き合う時間が確保されている」という評価が100%(昨年度65%)ということも肯定的評価の上昇につながっている。	計画的な不祥事防止委員会・服務研修を実施するとともに、さらなる業務での「充実感」「子どもと向き合う時間の確保」を目標に、業務改善を行い教員の満足度向上を図る。	○			・教職員の思いを大切にしながら、工夫して業務改善に取組まれていると思います。		
		◎働き方改革 ★次世代の働き方への体制づくり	○時間外勤務の短縮 ○計画的な定時退校日の実施	時間外勤務月45h以下を6か月以上実施	100	67%	50.0%	50%	D	定期的に衛生委員会で職員の健康状況も把握し、教職員のアンケートをもとにしながら、業務改善を行った。具体的には成績処理時間の確保や、時程の改善による放課後時間の確保等である。しかし、緊急な対応等もあり、時間内に勤務を終えることは困難であった。	業務内容の効率的な分担や、日課表を見直し、放課後等の時間の確保を行うとともに、職員の意識改革を図っていく。	○			・児童に向き合う時間が少なくなっていると思います。		
本年度の重点目標については◎印で示す。						【j: 自己評価 評価】 A: 100≦(目標達成) B: 80≦(ほぼ達成)<100 C: 60≦(もう少し)<80 D: (できていない)<60 【l: 学校関係者評価 評価】 イ: 自己評価は適正である。 ロ: わからない。 ハ: 自己評価は適正でない。											